



# 文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

*Bunka Gakuen University*

文化服装学院

*Bunka Fashion College*

文化ファッション大学院大学

*Bunka Fashion Graduate University*

文化外国語専門学校

*Bunka Institute of Language*

Title	ロシア・アヴァンギャルドのファッションデザイン：アレクサンドル・ロトチェンコの男性用作業服
Author(s)	北方, 晴子
Citation	文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 49 (2018-01) pp.85-90
Issue Date	2018-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10457/2765">http://hdl.handle.net/10457/2765</a>
Rights	

## ロシア・アヴァンギャルドのファッションデザイン —アレクサンドル・ロトチェンコの男性用作業服—

Aleksandr Rodchenko's Work Clothes for Men

北方 晴子

Haruko Kitakata

### 要旨

20世紀初頭のファッションはアートとの関係を強めていった。ファッションは新しい時代に相応しい作品の創造に取り組み、そしてアートにおいても、新しい分野が次々と登場した。アーティストらは、生活全般をアートとして捉え、ファッションをもその対象とした。彼らが本来対象にしているものの領域を超えて活動したことは、珍しいことではなかった。そのような中、ロシア革命を挟んで1910年代から1930年代にかけて起こったロシアにおける前衛芸術運動「ロシア・アヴァンギャルド」も、ファッションやテキスタイルにおいて新しい作品を生み出していった。

本研究ノートでは、ロシア・アヴァンギャルドのファッションデザインとアレクサンドル・ロトチェンコがデザインした男性作業服について考えるものである。ロシア・アヴァンギャルドのデザインは、社会主義思想を土台にしたデザインであった。大衆のためのデザインを目的としているため、より多くの人に広げるためには、大量生産が不可欠である。大衆的で、繰り返し複製が可能なデザイン理念が、ファッションにも応用され、ストレートなラインや幾何学的なデザインが好まれ、複雑なデザインよりもシンプルで合理性のある新しいモダンなデザインが好まれた。ロトチェンコがデザインした作業服こそ、ロシア・アヴァンギャルドが目指すシンプルかつモダンな作業服のファッションデザインであった。

●キーワード：ロシア・アヴァンギャルド (russian avant-garde) / ファッション (fashion) / 男性服 (men's fashion)

### はじめに

20世紀初頭のファッションが、アートとの関わりを強めていったことは、周知の事実である。ファッションは新しい時代に相応しい作品の創造に取り組み、アートとの関わりを強めて、また芸術及びデザインにおいても、新しい分野が次々と登場した。例えば、1907年頃にパブロ・ピカソ Pablo Picasso (1881-1973) とジョルジュ・ブラック Georges Braque (1882-1963)<sup>1)</sup> を中心として起こった「キュビズム」<sup>2)</sup>、1909年にイタリアでフィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ Filippo Tommaso Marinetti (1876-1944)<sup>3)</sup> らの「未来派」<sup>4)</sup>、1911年のドイツでヴァシリー・カンディンスキー Vassily Kandinsky (1866-1944)<sup>5)</sup> らの「青騎士」<sup>6)</sup> など、新しい動きが見られ始めた。さらに、1903年から活動を開始した「ウィーン工房」<sup>7)</sup>、1919年に創設された「バウハウス」<sup>8)</sup>、ロシア革命<sup>9)</sup>後に展開された「ロシア・アヴァンギャルド」などは、ファッションやテキスタイルの部門を抱え、新しい作品を次々と生み出していった。いずれもパ

リ以外の都市でファッションデザインがアートに組み込まれていったことは興味深い。アーティストらは、生活全般をアートとして捉え、ファッションをもその対象とした。当時のアーティストらが本来対象にしているものの領域を超えて活動したことは、珍しいことではなかった。ファッションの本拠地であったパリでも、デザイナーらがアートからのヒントを取り入れていた。

筆者は、これまでもアーティストと男性服との関わりについて研究を進めてきたこともあり、本研究ノートでは、ロシア・アヴァンギャルドのファッションデザインと男性服について考えるものである。

### I ロシア・アヴァンギャルドについて

ロシア・アヴァンギャルド russian avant-garde は、ロシア革命を挟んで1910年代から1930年代にかけて起こったロシアにおける前衛芸術運動である。革命後のロシアにおいて、様々な分野に与えた影響は計り知れない。芸術の根本的な革新、過去と伝統との断絶、新しい

内容や手法の探求、社会との積極的な関わりなどを特徴とし、美術、演劇、文学、音楽、建築、映画、デザイン、舞台、ファッション、テキスタイル、陶芸などの複数の領域に及んだ。ロシア・アヴァンギャルドは芸術によって新しい社会を創り出そうと夢を持った。アートで世界全体を変えることが出来ると考えた。

1910年代から1920年代初頭にかけて、最も創造的な活動が行われた。特に、ロシア・アヴァンギャルドの大きな出来事の一つが、1915年、シュプレマティズム<sup>10)</sup>を標榜したカジミール・マレーヴィチKasimir Malevich (1878-1935)<sup>11)</sup>と構成主義<sup>12)</sup>の基礎を築いたウラジーミル・タトリンVladimir Tatlin (1885-1953)<sup>13)</sup>がロシア・アヴァンギャルドの代表格と言われ、二大潮流の中心となり、多くの作品を残した。創造の自由を求め、1923年頃まで様々な実験的な試みが展開されていった。1921年頃からは、アレクサンドル・ロトチェンコAleksandr Rodchenko (1891-1956) やリュボフ・ポポワLiubov Popova (1889-1924)<sup>14)</sup>らによる構成主義が興隆した。また1910年代には詩人のウラジーミル・マヤコフスキーVladimir Mayakovsky (1893-1930)<sup>15)</sup>や詩人で画家のダヴィド・ブルリユークDavid Burliuk (1882-1967)<sup>16)</sup>らによる未来派が文学の領域で活動を行った。マヤコフスキーは1923年に雑誌『レフLEF』<sup>17)</sup>を、1927年には『新レフ』を創刊し、これらの雑誌は映画、演劇、造形芸術、文学の理論が展開されるロシア・アヴァンギャルドの舞台となった。

やがて、1930年頃にはマヤコフスキーの死や、ロシア・フォルマリズム<sup>18)</sup>批判やスターリニズム<sup>19)</sup>から激しく非難を浴び、運動そのものの行き詰まりにより終息を迎えた。自由な空気も体制によって抑え込まれていった。

## II ロシア・アヴァンギャルドのファッションデザイン

20世紀初頭の芸術及びデザインにおいて、新しい分野が次々と登場し、芸術家が本来対象にしているものの領域を超えて活動したことは、前述した通りである。ロシア・アヴァンギャルドは「大衆のための芸術、日用品のデザイン」という理念を掲げ、活動を行った。ロシア革命を実現させた民衆のエネルギーによって大衆とともに誕生した芸術と言える。日用品のデザインとして、ファッションやテキスタイルはその対象となっていった。そして、ファッションデザインにおいては、革命後の新しい時代のイメージを表現するものが求められた。

イデオロギーを表現するには、ファッションは何もよりも分かりやすい表現手段である。

大衆のための芸術であるから、より多くの人に触れてもらわなければならない。そこには、大量生産が必要となる。したがって、デザインも大量生産を前提としたものが求められた。それらは、革命後の新しい時代の新しい人たちのために、働く人を意識した機能的な仕事服が次々と登場した。そのデザインの主流は、実用性を意識し、デザインを展開していった。

また、アヴァンギャルドのアーティストの多くは、舞台コスチュームも手掛けた。見せるための舞台用の衣装と、働くための服という両極端のデザインの矛盾は、デザインの普及という点において必要であったと考えられよう。

当時のロシアの衣服とテキスタイルデザインについては、藤原によると、1910年代の終わりから衣服とテキスタイルデザインを担う組織が相次いで設立された<sup>20)</sup>。そうした時代に生まれた新しい分野が労働着のデザインであったことを指摘している<sup>21)</sup>。

ファッションデザイン及びテキスタイルデザイン、舞台衣装を多く手掛けたのは、画家ワルワラ・ステパーノワWaruwara Sutepanowa (1894-1958)<sup>22)</sup>であった。ステパーノワは、同じく画家であったポポワとともに、絵画から更紗へと、革命によってテキスタイル産業は壊滅的な状況になりながらも、1921年から始動した染色工場においてテキスタイルデザインの生産を始めた。テキスタイルデザインが多くプリントされることで、絵画がプリントという形で生産主義を結びつき、そしてテキスタイルデザイン分野の開拓へと繋がった。1920年代には、大量生産が可能な近代的設備も海外から輸入された<sup>23)</sup>。

デザインの多くは、ロシア・アヴァンギャルドが目指した大衆的で大量生産が可能なデザインが、テキスタイルにも応用された。大量に布を生産するためには、生産性の高いプリントが適している。画家たちは、それまでのキャンバスを布に移行したのである。大量の布を生産するには、単純な柄が適している。花柄のような曲線を多く必要とするデザインではなく、シンプルで単純な柄の方が大量生産に向いていた。そうした柄は、革命のシンボルとしても使われるデザインである。

また、デザインされた衣装には、スポーツユニフォームもあった。婦人用のスカートのユニフォームもあるが、フォルムは現代で言うユニセックスのデザインも

あった。幾何学的なフォルムやデザインは動きやすさを重要視したものと思われる。

ロシア・アヴァンギャルドのアーティストらがデザイン制作したファッションデザインは、多くが男性服よりも女性服が多いのは、女性の社会進出は始まった時期と重なったため、まさに新しい時代に合った新しい女性のための服がデザインされたと考えられる。

### Ⅲ アレクサンドル・ロトチェンコの男性用作業服

アレクサンドル・ロトチェンコは、ロシア構成主義の中心的人物であった。1891年にモスクワで生まれ、カザンで育った。1910年から14年までカザンの美術学校で学び、後に妻となるワルワラ・ステパーノワと出会った。学校を卒業したロトチェンコはモスクワに戻り、未来派やキュビズムに刺激を受けながら、デザイナーとしての感性を磨いていった。モスクワでは、タトリン、マレーヴィッチ、ポポーワらと知り合い、実験的な作品を発表するようになる。フォトモンタージュ、グラフィックを数多く手掛けた。1921年から新経済政策（ネップ）が始まり、実用品の生産が国家の課題になっていった。ロトチェンコは、舞台衣装や婦人服も手掛けたが、本稿では、男性服のみを扱う。

1922年、A・ロトチェンコは男性用の作業着をデザインした（写真1）。一見シンプルに見えるが、現在見



写真1 作業着を着たアレクサンドル・ロトチェンコ 1922年

ても、モダンでお洒落である。ロトチェンコの息子によれば、ウールと革が使用され、ミシンで制作された<sup>24)</sup>。腰と胸の部分には、実用性を重視した大きなポケットが付いている。このポケットは、芸術家の作業に必要な品々、定規、コンパス、色鉛筆、はさみ、時計等を収納する目的でデザインされた。まさしく、労働者のための労働着をデザインした。ロシア構成主義者たちによれば、衣服のデザインの基礎になるのは、形、着用する人の職業に適した機能性<sup>25)</sup>であった。これこそ、ロシア・アヴァンギャルドが目指した実用的な男の作業着と言える。この作業着はロシア・アヴァンギャルドの代表的な衣服デザインとして伝えられている。

写真は、デザインを手掛けたA・ロトチェンコ自身がオブジェの前でポーズを取り、作業着を着ている。頭はツルツルに剃っているのか丸坊主でパイプを加えた姿は、ロシア・アヴァンギャルドの旗手としての貫録さえ感じられる。

しかしながら、この作業着は量産されることなく、アイデアとして留まった。

このデザインを見て、筆者が思い出すのは、イタリア未来派のエルネスト・タイアート Ernesto Thyart (1893-1959)<sup>26)</sup>である。

イタリア未来派は、1910年代から1920年代にかけて、単調になった男性服の改良を試みて、色やデザイン性を重要視し、未来派的男性衣装を提案してきた。イタリア未来派は、当初はイタリアの芸術を改革することが目的であったが、次第にイタリアの伝統や歴史を否定してきた。特に、ジャコモ・バッラ Giacomo Balla (1871-1958)<sup>27)</sup>を中心として、メンズファッションにみられる伝統的・保守的な傾向の男性服を否定し、未来派的な斬新なデザインの男性服のデザイン提案を行った。男性服を巡っては、1930年代までデザイン提案を行っている。

E・タイアートはイタリア未来派に加わる以前の1918年に「トゥータ TUTA」を発表した。TUTAも男性用の実用的作業着としてデザインされた。上着とズボンが一体化したいわゆる「つなぎ服」である。この服が誕生した背景には、戦後間もない貧困の中で、そう対応するか、そして実用的で見た目の良さも重視された。A・ロトチェンコがデザインした作業着と同じように、身頃の前後に大きなポケットがついていた。E・タイアートのTUTAのデザインとA・ロトチェンコのデザインした作業着のデザインの同質性は明らかである。また、つなぎ服、すなわちオーバーオールは、20世紀初めに特に

アメリカでは労働着のシンボルと見なされていたデザインである。E・タイアトが未来派に加わって以降は、タイアトの実用的な男性服の提案はなされていない。

## おわりに

ロシア・アヴァンギャルドのアーティストたちのデザインは、大衆的で、繰り返し複製が可能なデザインを求めた。「大衆」のためであるから、より多くの人に広げるためには、大量生産が必要である。すなわち、産業的デザインが重視された。大量に衣服生産を可能としたミシンを使い、工業生産されていった。当然、デザインは大量生産に向けたものが前提となる。かつて19世紀に登場した注文服に見られたような複雑なデザインでは難しい。デザイン性の強いものや、曲線が多くみられるファッションデザインを仕上げるには、熟練した技術や勤が求められる。したがって、ファッションデザインには、ストレートなものが求められた。さらに、単純なストレートなラインは、着用するものに取り、着易さという利便性も備える。より広く多数の人に着てもらうためにも、そうしたデザインが適していると考えられる。複雑なデザインよりもシンプルで合理性のある新しいモダンなデザインが求められた。

他方、イタリア未来派はデザイン性、色に、革新性を求めていった。ロシア・アヴァンギャルドのアーティストたちがデザインは、イタリア未来派に比べてダイナミックさ、自由さは見られない。生産性、合理性という点は、イタリア未来派には見られなかったことである。

深井が「ロシア・アヴァンギャルドは当時の前衛芸術との関わりを持ちながらも、工業生産としっかり結びつき、社会での実用性を目指した点では、独自性を持っていた。」<sup>28)</sup>と指摘するように、ロシア・アヴァンギャルドたちは、西ヨーロッパのデザインを否定し、ほかのどの地域のイデオロギーとも類似しないデザインを模索していた。当時のアヴァンギャルドアーティストらのファッションデザインは文字通り前衛的なデザインが主であった。しかし、ロシア・アヴァンギャルドらのデザインは実用服としての衣服の革新を求めた。社会主義国家は、階級制度をなくし、すべての人を平等にする理想があった。そうした社会主義のイデオロギーを芸術のなかでどう表現するのか、課題であった。ロシア・アヴァンギャルドのアーティストは、社会主義思想を土台にしたデザインを提案していった。それが、「大衆化」「大量生産」であった。すべての人を平等に、沢山のの人に広げ

るためのデザインが、テキスタイルデザインやファッションデザインに影響を与えた。それこそ、彼らが手掛けたテキスタイルデザイン、そしてA・ロトチェンコの作業服にも表れたシンプルかつモダンなファッションデザインであった。

その後も、ロシア・アヴァンギャルドを彷彿させる幾何学的なモチーフや象徴的デザインは、モードの世界で見ることが出来る。デザイナー、ポール・ポワレ Paul Poiret (1879-1944)<sup>29)</sup>はロシア風ファッションを1911年に発表している。ガブリエル・シャネル Gabrielle Chanel (1888-1971)<sup>30)</sup>は、1922年にロシアに影響をうけた作品を発表している。特に、1910年代から20年代のパリでは、ロシア革命後に多くの亡命者を受け入れると同時に、ディアギレフ Sergai Diaghilev (1872-1929)<sup>31)</sup>率いるロシア・バレエ団<sup>32)</sup>のオリエンタルな舞台と衣装が注目された。ロシア・バレエ団の衣装デザイナー、レオン・バクスト Leon Bakst (1866-1924)<sup>33)</sup>のデザインは、当時のファッション界にロシア的な要素が加わるきっかけを作り、パリでオリエンタリズムを起こした一因となっている。

20世紀後半には、1976年にイヴ・サンローラン Yves Saint-Laurent (1936-2008)<sup>34)</sup>が、そして1986年にはジャン＝ポール・ゴルティエ Jean-Paul GAULTIER (1952- )<sup>35)</sup>がロシアコレクションを発表した。いずれも、特徴的な色使いや幾何学図形の力強いエネルギーに溢れたビジュアルを表現したデザインである。それらは、ロシア・アヴァンギャルドが繰り返しテキスタイルやポスターなどに応用した鮮やかなコントラストのある色やグラフィックデザインデザインであることを考えると、後世に与えた影響は計り知れない。

## 注

- 1) ジョルジュ・ブラック Georges Braque (1882-1963) フランスの画家。ピカソと共にキュビズムの創始者のひとり。1910年代にはピカソとパリで作品も製作していた。
- 2) キュビズム Cubism は、20世紀初頭にP・ピカソとG・ブラックによって創始された現代美術の大きな動向。いろいろな角度から見た物の形を一つの画面に収め、単純化・抽象化を主な特徴とする。
- 3) フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ Filippo Tommaso Marinetti (1876-1944) は、イタリアの詩人、作家、批評家、未来派の創始者。1909年、フランスのフィガロ紙に「未来派宣言」を発表した。
- 4) 未来派 Futurism は、20世紀初頭にイタリアを中心として起こった前衛芸術運動。文学、美術、建築、音楽と広範な分野で展開されたが、1920年代からは、イタリア・ファシズ

- ムに受け入れられ、戦争を「世の中を衛生的にする唯一の方法」として賛美した。
- 5) ワシリー・カンディンスキー Vassily Kandinsky (1866-1944) は、ロシア出身の画家、美術理論家。抽象絵画の創始者。1911年に「青騎士」(デア・ブラウエ・ライター)を結成した。当時のソ連では前衛芸術はレーニンによって「革命的」として認められており、カンディンスキーは政治委員などを務めた。スターリンが台頭するにつれ前衛芸術が軽視されるようになり、1922年からはバウハウスで教官を務めた。
  - 6) 青騎士は、1912年にカンディンスキーとフランツ・マルクが創刊した総合的芸術年刊誌。またミュンヘンにおいて1911年12月に集まった表現主義画家たちによる芸術家サークル。活動期間は、年刊誌の創刊1911年から第1次世界大戦によってメンバーが散った1914年までと短命であった。
  - 7) 20世紀始め、建築家ヨーゼフ・ホフマン Josef Hoffmann (1870-1956) とデザイナー、コロマン・モーザー Koloman Moser (1868-1918) によって1903年に設立した工房。住宅、インテリア、家具、宝飾品、ドレス、日用品など、生活全般に関わる様々な分野でデザインを行った。イギリスの詩人、思想家、デザイナーであるウィリアム・モリス William Morris (1834-1896) が主導したデザイン運動アーツ・アンド・クラフツ運動 Arts and Crafts Movement に影響を受けて、総合芸術、生活の芸術化を目指した。直線的、幾何学的な装飾が特徴である。1932年に解散した。
  - 8) バウハウス Bauhaus は、1919年、ドイツ・ヴァイマルに設立された、工芸・写真・デザインなどを含む美術と建築に関する総合的な教育を行った学校。また、その流れを汲む合理主義的・機能主義的な芸術を指す。1933年にはナチスにより閉校。
  - 9) ロシア革命は、1917年にロシア帝国で起きた2度の革命。1917年2月には、大帝国ロシアの皇帝ニコライ2世が退位し、帝国は崩壊。続いて新たにソビエト連邦が誕生する。特に史上初の社会主義国家樹立につながったことに重点を置く場合、この10月革命のこと指す。
  - 10) シュプレマティスム Suprematism は、1915年、ロシアにおいてカジミール・マレーヴィチが主張した、抽象性を徹底した絵画の一形態。禁欲的で完全なる抽象絵画。リュボーフィ・ポポヴァ Liubov Popova (1889-1924) がこの傾向に含まれる。
  - 11) カジミール・マレーヴィチ Kazimir Malevich (1878-1935) は、ウクライナ・ロシア・ソ連の芸術家。特に画家として知られ、戦前に抽象絵画を手掛けた最初の人物。キュビズムや未来派の強い影響を受けて派生した、色彩を多用しプリミティブな要素を持つ。1910年代半ばに作風は一転し、無対象を主義とする「シュプレマティスム」に到達した。ロシア・アヴァンギャルドの一翼を担い、純粋に抽象的な理念を追求した。スターリン政権下のソ連で美術に対する考え方の保守化が徹底し、前衛芸術運動が否定され、芸術家は弾圧された。
  - 12) ロシア構成主義 Constructivism は、キュビズムやシュプレマティスムの影響を受け、1910年代半ばにはじまった、ソ連における芸術運動。絵画、彫刻、建築、写真等、多岐にわたる。1917年のロシア革命のもと、新しい社会主義国家の建設への動きと連動して大きく展開した。特徴は、抽象性、非対象性、幾何学的形態、革新性、象徴性等である。平面作品にとどまらず、立体的な作品が多い。1920年代後半には、スターリンの下でソ連政府が保守化し、社会主義リアリズムが重視されて、衰退した。
  - 13) ウラジーミル・タトリン Vladimir Tatlin (1885-1953) は、ロシア出身の画家、彫刻家、建築家、デザイナー、舞台美術家。モスクワの絵画・彫刻・建築学校で学ぶ。1917年のロシア革命後は芸術学校で教鞭を執る。カジミール・マレーヴィチらとともに、ロシア・アヴァンギャルドおよびロシア構成主義の代表的な作家の一人にあげられる。
  - 14) リュボーフィ・ポポワ Liubov Popova (1889-1924) は、ロシア・アヴァンギャルド、ロシア構成主義を代表する美術家、画家。パリでキュビズムを学び、未来派をも吸収する。1913年頃からロシアでウラジーミル・タトリンのもとで働く。色彩とフォルムが調和したバランスのよい構成主義的絵画を多く残した。1920年代には、織物、染色、舞台装飾、衣装、家具デザインなど広い分野で活躍した。
  - 15) ウラジーミル・マヤコフスキー Vladimir Maiakovski (1893-1930) は、ロシア・アヴァンギャルドを代表する詩人。マルクス主義文学に傾倒し、ロシア社会民主労働党に加わる。後にロシア・アヴァンギャルドを担う芸術家たちと交流が始まる。1923年に芸術左翼戦線(レフ)を結成し、ソ連初期の芸術界をリードした。
  - 16) ダヴィド・ブルリユク (1882-1967) は、ロシア未来派の画家。1918年に、マヤコフスキーらとともに「未来派新聞」を1号のみ刊行。
  - 17) レフ LEF は、ロシア・アヴァンギャルド期における文学・芸術に関する左翼団体およびその機関誌名。文学と芸術を通じて、左翼的な哲学やイデオロギーの構築・実現を目指した。1923年から1924年まで刊行された。編集責任者はマヤコフスキー、表紙その他デザインは主としてロトチェンコが担当した。1927年には、新レフ New LEF が創刊された。
  - 18) ロシア・フォルマリズム Russian formalism は、1910年半ばから1930年代にかけて行われた文学運動および文学批評一派。スターリン政権から政治的弾圧を受けた。
  - 19) スターリニズムまたはスターリン主義は、1924年から1953年までのソビエト社会主義共和国連邦最高指導者ヨシフ・スターリンの発想と実践の総体で、指導者に対する個人崇拜、軍事力や工作活動による暴力的な対外政策、秘密警察の支配を背景としたまた、それに通じる思想・体制。
  - 20) 藤原克美、「1920年代～30年代のソビエト・ファッション」、『着衣する身体と女性の周縁化』、思文閣出版、2012、p.128
  - 21) 藤原克美、前掲書、p.129
  - 22) ワルワラ・ステパーノワ Varvara Stepanova (1894-1958) アレクサンドル・ロトチェンコの妻でアーティスト。
  - 23) 藤原克美、前掲書、p.130
  - 24) Radu Stern, *Against fashion*, Lond. 2004, pp.52-53
  - 25) *ibid.*, p.53
  - 26) Ernesto Thayer (1893-1959) 画家、彫刻家。1929年にイタリア未来派に加わった。未来派に加わる前は、デザイナー。マドレーヌ・ヴィオネのアトリエでファッションデザインに携わっていた。
  - 27) 深井晃子、『ファッションの世紀』、平凡社、2005年、p.76
  - 28) ジャコモ・バッラ Giacomo Balla (1871-1958) は、イタリア未来派の画家。未来派の中ではファッションへの関心が高く、特にメンズファッションに関する宣言を発表した。
  - 29) ポール・ポワレ Paul Poiret (1879-1944) は、20年代初頭にコルセットから女性の身体を解放した。1910年代から20年代にかけて、アーティスト的な作品を数多く発表し

- た。
- 30) ガブリエル・シャネル Gabrielle Chanel (1883-1971) は、ブランド「ココ・シャネル」の開店初期から恋人から出資を受けて事業を拡大していく。ロシア風モードを発表した時には、ロシア貴族ドミトリー大公と恋愛中だったこともあり、影響を受けた。
- 31) セルゲイ・ディアギレフ Sergai Diaghilev (1872-1929) は、1909年にロシア・バレエ団を率いてパリへ進出。新しい芸術を舞台に統合した20世紀の舞台芸術を方向づけた。
- 32) ロシア・バレエ団バレエ・リュス (Ballets Russes) は、セルゲイ・ディアギレフが主宰したバレエ団。1909年にパリのシャトレ座で旗揚げをしてから、ディアギレフ死去後の1929年に解散するまでの間、パリを中心として活動し、今日のモダンバレエの基礎を築いた。
- 33) レオン・バクスト Leon Bakst (1866-1924) は、ロシアの画家、挿絵画家、舞台美術家、衣装デザイナー。ディアギレフが主宰したロシア・バレエ団で、舞台衣装、舞台美術を担当した。
- 34) イヴ・サンローラン Yves Saint Laurent (1936-2008) は、1965年にオランダ抽象画家モンドリアンに影響をうけたモンドリアンルックを発表し、60年代を代表するデザイナーとなった。その後も、ポップアート・ドレスなどアーティスティックなドレスを発表。1970年代にはコサック・ルックやフォークロア調のデザインを発表。
- 35) ジャン＝ポール・ゴルティエ Jean-Paul GAULTIER (1952-) 1980年代、アヴァンギャルドなファッションを次々と発表し、トップデザイナーへととなった。

#### 参考文献

- 1) 海野 弘監修、『ロシア・アヴァンギャルドのデザイン』、パイ・インターナショナル、2015

- 2) 海野 弘、『ロシア・アヴァンギャルドのデザイン』、新曜社、2000
- 3) ヴィーリ・ミリマノフ、桑野 隆訳、『ロシア・アヴァンギャルドと20世紀の美的革命』、未来社、2001
- 4) 江村 公、『ロシア・アヴァンギャルドの世紀』、水声社、2010
- 5) 十三千鶴、「ロシア・アヴァンギャルドとファッション」、『日本美術工芸8』、1990
- 6) タチャナ・ヴィクトロヴナ・コトヴィチ、桑野 隆訳、『ロシア・アヴァンギャルド小百科』、水声社、2008
- 7) 藤原克美、「1920年代～30年代のソビエト・ファッション」、『着衣する身体と女性の周縁化』、思文閣出版、2012
- 8) 多摩美術大学美術館、「革命とファッション 亡命ロシア、美の血脈」、2009
- 9) 常見美紀子、「ロシア・アヴァンギャルドにおけるファッションおよびテキスタイル・デザインの理念について」、『デザイン理論. 31』、関西意匠学会誌編集委員会、1992
- 10) 長塚英雄編集、『ロシアの文化・芸術』、生活ジャーナル、2011
- 11) 長澤 均、「革命の衣服、衣服の革命」、『ワールド・ムック 892 ワークウエア』、ワールドフォトプレス、2012
- 12) 深井晃子、『ファッションの世紀』、平凡社、2005年
- 13) 水野忠夫、『ロシア・アヴァンギャルド』、パルコ出版局、1985
- 14) 和多利恵津子、『ロトチェンコの実験室』、新潮社、1995
- 15) Radu Stern, *Against fashion*, Lond. 2004
- 16) Ebelina Khromtchenko, *Russian Style*, NY, 2009

#### 図版出典

- Radu Stern, *Against fashion*, Lond. 2004